

# 泌尿器科紀要

第 6 卷 第 12 号

昭和 35 年 12 月

## 随 想

### 吾国泌尿器科学の発達を顧みて

日本医科大学教授 北 川 溥

近年各大学に泌尿器科学講座が續々新設されて来た事は御同慶の至りである。現在泌尿器科が外科の一分科である事を疑うものはない。

吾国の泌尿器科は外科出身の朝倉文三博士が欧州に於て斯学を専攻し帰国されてから明治30年(1897)民間に専門病院を開設し泌尿器科学の発展に尽力され、又日本泌尿器科学会並に学会雑誌の創立者である事は既に文献に明かな処である。然し吾国の泌尿器科は皮膚科泌尿器科として発展の歴史をたどつて来た事は否定出来ない。東大初代教授土肥慶蔵先生がスクリーバ外科教室の出身であり、外科学専攻のため独逸留学中官命により皮膚科に転向され、同時に又泌尿器科学性病学を修め、明治31年(1898)帰国された事が東大に皮膚科泌尿器科講座の発祥した所以である。1936年私が独逸国内大学の皮膚科教室を歴訪した際、皮膚科外来で泌尿器科患者を診察し、膀胱鏡検査施設を備えている教室を見学した事がある。尤も手術は外科に依托すると云う事であつた。膀胱炎主訴の患者が淋疾を疑つて皮膚科性病科を訪れた事は独逸も吾国も変りはなかつた。泌尿器科患者の大部分は膀胱症状を主訴として来院する事は現在も変りはない。淋菌性疾患の蔓延又極めて難治であつた時代に、かく誤解された事は当然の事である。又泌尿器科診察には淋菌を度外視する事は出来なかつた。例え膀胱鏡検査には淋菌を検微鏡的に検査した上でないに行つてはならない。或はそれによる続発症状を充分警戒す可しとは日常先輩から注意されていた。又淋菌による疾患をマスターする事なくして泌尿器科治療は不可能であつた。これ等の点も吾国に於て皮膚科泌尿器科として緊密な関係のもとに発達して行つた原因でもあろう。

ペニシリンその他各種抗生物質発見以前の泌尿器科学会演題の過半数が淋菌に関連する研究があつた事も珍らしくはなかつた。かように淋菌と泌尿器科疾患との間には緊密な関係があつた事は皮膚性病科と泌尿器科との間に親近性をもつていた一因でもあり、又その方が臨床上便利であつた事も事実である。淋菌の恐しさを知る機会のない若い臨床家諸氏には到底想像し得ない点であらう。

土肥先生は私の学生並びに教室で御指導を受けた大正時代には泌尿器科にはあまり興味を持つておられない様に噂されていた。然し之は全く誤解である。高橋明東大名誉教授も述べておられる様に泌尿器科講座独立は先生の熱意ある御努力の賜物である。先生が如何に泌尿器科にも関心を持つておられたかについて私の医局時代の一挿話を述べさせて頂こう。私が大正14年頃男子病室の受持であつた時、遇々柴田と云う40才位の血尿患者が長らく入院していた。先生御回診の折、この血尿はどこから出るとの御質問に受持交代早々であつた私には返答する事が出来なかつた。すると先生は膀胱鏡検査をするから準備せよとの御命令である。先生は泌尿器科にはあまり関心を持つておられないと思つていた私のみならず医局員

一同驚いていた処、先生は早速御自身で検査用膀胱鏡を挿入し、その所見や操作法について懇切丁寧に御教示下さったのには私並に同席した先輩も敬服してしまつた。こんな事は近年にない事だとの噂であつた。検査が終了すると、この腎出血の腎盂レントゲン検査をしなさいとの御命令である。私は入局2年、当時は助手級にならぬと膀胱鏡さえ手に触れる事は許されなかつた。まして腎盂レ線撮影など見た事もない。Voelcker u. Lichtenberg が創めてピエログラフイーに成功したのが1909年であるから、吾国では未だ殆ど行れていなかつた。先輩武村俊雄博士に相談すると、佐谷有吉博士（故阪大名誉教授）が洋行から教室に帰られてから試みられ、当時レントゲン係であつた同博士が御手伝したがあまりはつきりした写真は得られなかつたとの話であつた。当時文献によるとピエログラフイーには死亡例も経験され慎重を要すと報告されていた。尤もそれはコラルゴールを使用していたためかも知れない先生の命令で私は先輩高橋信吉博士（故台北大教授）に手伝つて貰つて尿管カテーテルを挿入し、当時のレ線係北村精一博士（現長大学長）の協力を得て、兎に角出血している1側腎の撮影に成功した。之を回診の折先生に御目にかけての処、大変満足されそのフィルムを持つて明るい窓ぎわまで歩を運び熟視され、もう1側もやれと激励された。然しこの写真もただ腎盂が描写されたと云うに過ぎない、現在の写真から見るとお恥しいものであつた、かく東大に於ける腎盂レ線撮影は土肥先生の炯眼と武村、北村両博士等の努力の結果、今日の発達を招致したと申しても過言ではない。特に大正15年6月15日東大皮膚科外来講堂に於ける皮膚科学会東京地方会第116回例会に於て中野等先生の「ピエログラフイーに就て」の報告の追加として塩田外科齊藤正憲助教授、近藤豊治博士の追加供覧した腎臓護腫、腎臓水腫の美しい腎盂レ線写真は強く先生の心をうつたらしい。この機会をうまくつかんで、それ迄手に入れ兼ねていたクーリツヂ管球やブツキーブレンデの購入に成功したのは、北村精一博士の当時既に頭角をあらわしていた政治的手腕にもあるが、又土肥先生の泌尿器科学に対する熱意があつたからこそと思われる。

ガス管時代のエピソードとして当時吾国で最も尊敬されていた東郷元帥の膀胱結石再発を懸念されて土肥先生が北村博士に骨盤腔撮影を依頼された時の先生のしんけんな顔付き：一回の撮影で成功した時の喜ばれ方、当時の世情並に機械の性能を知る者でなくては到底理解出来ないであろう。

序に吾国に於ける腎盂レ線撮影の発達を文献に就いて回顧してみよう。大正9年6月20日皮膚科学会大阪地方会例会で井尻辰之助博士がコラルゴールを造影剤とした右遊走腎の患者に撮影した2枚のレ線写真を供覧した。慶大北川正惇教授は大正10年1月26日皮膚科学会東京地方会臨時会にピエログラフイーの1例を報告され、同年佐谷有吉教授は皮膚科泌尿器科雑誌21巻に治療集談「ピエログラフイーに就て」を記載された。大正13年3月新瀉に於ける第24回皮膚科学会総会に於て京大柳原英、宮田多喜男両博士は「ピエログラフイーに就て」と題し30%ブroomナトリウムを造影剤とした20例27回の症例報告を行われた。かように文献をたどつてみると泌尿器科領域に於けるレ線検査法も未だ尚揺籃時代であつた事が判る。かかる時代にレントゲンの医学的応用に熱心であつた土肥先生の存在は泌尿器科学の発展に大きな影響を与えた事は否定出来ない。

泌尿器科学もレ線検査法の発達、特に各種抗生物質の発見によつて診断並に治療上劃期的進歩を遂げた。30年前の状況を回顧し隔世の感がある。今後益々斯学の発展を祈つて筆をおく（昭和35年11月記）。